

「ミヤコ」としての機能を回復した大正・昭和の大札が持つ意味を、多くの人々に知ってもらうために、即位礼と大嘗祭に関する展覧会ができないかと思い立ちました。いろいろな関係者にお話したところ、幸い今年に入り、心ある方々から理解と応援をいただいて、何とか開催できることになりました。

それが9月10日から京セラ美術館



(伏見区：11月13日まで)と城南宮齋館(同：10月23日まで)で、「近世京都の宮廷文化」展覧会というテーマで開かれています。主に江戸時代を中心にして、明治・大正・昭和にわたる御大札に関する展覧会でございます。

この御大札が執り行われた意味は、京都にとって極めて重要だということ、を、ぜひ皆さまにもご理解い



ただけたら幸いです。市民生活の面でも、京都御所や御苑一帯だけでなく、京都市内の街並みが格段に整備され、伝統の中にモダンな雰囲気と併せ持つようになったのは、大正と昭和の御大札を挙行するに当たり、緻密な計画の下に多くの予算を掛け、新しいまちづくりを進められたからだと思えます。

この京都は、決して過去の遺産(廃都)でもなく、単なる観光の対象(古都)でもありません。明治以降も、大正・昭和の大札を実施して「ミヤコ」の機能を回復した現役の宮都だということを、改めて強調しておきたいと思えます。

そうであれば、この「ミヤコ」としての機能を活用しながら、これに一段と磨きをかけるような工夫と努力を続けなければなりません。それが「双京構想」の現代的意義であり、また将来的課題だと考えております。(基調講演終了)

パネルディスカッション

京都の宮廷文化と 双京構想の歴史的意義

パネリスト

京都造形芸術大学教授
五島 邦治氏



特定非営利活動法人
京都観光文化を考える会、
都草 特別顧問
坂本 孝志氏



葵祭第61代斎王代
(平成28年)
西村 和香氏



コーディネーター

京都産業大学名誉教授
所功氏





◆**所** 京都のことは京都に生まれ育ち京都に長らく住んでいる人々が一番よく知っておられるはずですが、しかし、まことに失礼な言い方かもしれませんが、「灯台下暗し」の諺どおり、京都の本当の良さは、案外と京都の中にいる人には分からない、ということもあるのではないのでしょうか。昔から日本全国の人々にとって、また今や全世界から来日する人々にとっても、京都は格別な憧れ

の場所になっています。
では、それほど多くの人々をひきつけてやまない京都の魅力とは何なのでしょう。それを探りながら、

平安時代にタイムスリップ

◆**西村** 私は普段、実家である京漆器店の広報を務めています。今年5月に葵祭の第61代斎王代を務めさせていただきました。当日の写真を持ってまいりましたので、こちらを見ながら、その時の様子や感じたこととお話しいたします。

当日は、まず御所で化粧、次いで着付けをしていただきました。白塗りは人生で初めての経験でした。昔、私の母親も斎王代を務めさせていただきました時も、お化粧の担当者とは同じ方だったそうです。「昔は額の左右に殿上眉（てんじょうま

京都にゆかりある私どもが、これから何を心掛けて、どう力を尽くしていったらよいか、皆さんとともに考えてみたいと思っています。

ゆ）を描いていた」と母親が言っていたのですが、私の場合は本当の眉毛を生かす形で化粧を施していきましたので、少しずつ時代に合わせて変遷があるのだなと実感しました。

1時間ぐらいでお化粧は終わります。その後の着付けは、衣紋方と呼ばれる専門の着付け師3、4人で私を取り囲み、作業が進みます。装束は十二単（じゅうにひとえ）です。で、多くの衣を組み合わせて一つの着物になります。私はずっと立っているのですが、衣紋方の皆さんが1枚1枚丁寧に着せてくださる様子を

見ていて、大変そうと思うと同時に、とてもありがたく感じました。

私は十二単を着るのも初めてです。昔の織物はすごく重く、ずっしりとしています。身に付けると本当に子ども一人をおんぶしているぐらいの感覚で1日中過ごしていました。裾の長い長袴（ながばかま）を、重ね着した衣の下に身に付けるので、歩く時はすり足で進まざるを得ない状況でした。階段の上り下り

や、御禊の儀式で下鴨神社の御手洗池の水面に手をつける時は、集中力を高め、いろいろなところに力を入れて、転倒しないよう慎重に動いていました。

京都御所からの出発の際は、「行ってきなさい」と母親に背中を押されるような形で送り出されました。その瞬間は自分自身もすごく緊張していました。また、たくさんの方が出発を見守ってくださっていて、衣紋方の方も「気をつけて」と声を掛けてくださいました。行列で近くにいってくださいる女官役の方々からも「一緒に行きましょう」と言っていたとき、私の緊張をほぐそうとしてくださったことをうれしく思いました。下鴨、上賀茂神社への巡行中は、腰輿（およよ）と呼ばれる輿に乗った自分の目の前に優雅な行列が連なっており、きれいな行列だなど



ずっと思いながら見ていました。行列をなしている人たちの装束は、一人一人の衣装が違っており、もうちょっとゆっくり見たかったという思いもありますが、自分なりに目に焼き付けたつもりです。

下鴨神社の境内にある糺の森（た